「言葉を話すロバ」（聖書）をめぐる ラビ的解釈[1]

ジョナサン・マゴネット
小　林　洋　一（訳）

なぜ，ヘブライ語聖書には言葉を話すバラムのロバ[2]が登場するのか？もちろん，これは，答えることのできない問い，です。それは，なぜ，特定の聖書テキストがそこにあるのか，というような問いに答えられないのに似ています。テキストは与えられており，すでにそこに存在しているからです。

〔聖書テキストとの〕[3]時間的・空間的距離の隔たりの中で，私たちができることは，私たちの好奇心の質に合致する謎解きの糸口（clues）となるような素材（material）をテキストの中から選び，推量を働かせることに尽きます。この点から言えば，バラムのロバは，〔まずは人の好奇心に訴える〕という私の用いる教授法に合致します。私はときどき学生に「もし皆さんがロバだったら，聖書の中に何を探そうとしますか？」と尋ねます。〔最初〕その問いに面食らったとしても，学生たちの答えは極めてはっきりしています。「ロバの話です！」

〔聖書の中に〕ロバの話が多く出てきます。バラムのロバのような有名なものだけではなく，モーセをエジプトに運んだロバ，士師としてイスラエルの地を巡回したサムエルを乗せたロバなど，いずれも大切な動物として登場します。

1　〔訳者注〕これは 2014 年 6 月 27 日，西南学院大学博物館 2 階講堂で行われた大学学術研究所主催の公開講演である。原題は，Why is Balaam’s Talking Donkey in the Hebrew Bible?

2　〔訳者注〕ヘブライ語聖書では，雄ロバ（ハモール）（創 12：16，22：3，5 等）と雌ロバ（アトーン）が出てくる。バラムのロバは雌ロバとなっている。

3　〔訳者注〕〔　　〕は訳者の補足を示す。

要は，私たちは聖書の素材に自分の主観的関心をもって近づいていくということです。それが，歴史的・批評的であれ，フェミニスト的であれ，ラビ的であれ，人類学的であれ，霊的/敬虔的，あるいはヒューマニスト的/懐疑主義的であれ，さらには私たちが欲する，他のいかなる見方であれ，このことは変りません。そしてそうすることによって，私たちは，自らの問いに見合う答えを見つけることになります。しかしながら，これは重要な解釈学的原則ではありますが，私たちのその限られた見方をもって，それが何か絶対的真理を代表するかのような主張をすべきではないということも，これまた重要です。

私たちが始めに問うた〔なぜ，言葉を話すロバが〕という問いは，民数記22-24章の，３章にわたる「バラムとロバ」のようなテキスト〔の解釈〕に関しては特に大切です。なぜならば，現実にはありそうもない，そのような話を，どのように取り扱うべきかは，重大な問題だからです。これは，大人のレベルにおいては真剣に取り上げるべきものではなく，子どもたちにふさわしいおとぎ話として取り扱うべきなのでしょうか。あるいは，聖書に自分を賭ける者（committed）として，言葉を話すロバをして神の奇跡として，それを信じるべきなのでしょうか。

さて，今回は，このロバについての話を，まずは，民数記の３つの章の枠内で，そして次には，〔ヘブライ語〕聖書の最初の５つの書 ―― その収集された五書は，ユダヤ教の伝統では，トーラーとして知られているものですが ―― の，より広い物語の枠内で文脈化する（contextualise）ことで，この話のいくつかの側面に注目していきたいと思います。まず，この話が出てくる民数記とは，約束の地を目指して荒野を40年間旅するイスラエルの子らの放浪を物語るものです。この書には，モーセの政治的指導性についてのいくつかの試練が含まれ，旅程で出会った地域住民との衝突が描かれています。ところで，この民数記の語るバラム物語において最初に注目すべきことは，モーセが全く出てこないことです。さらには，イスラエルの子らでさえもが，〔バラムによって〕ただ遠くから眺められているに過ぎません。その代わり，二人の重要な主役が登場します。一人は，モアブの王である，バラク・ベン・ツィッポル（ツィッポルの子バラクの意），もう一人は，イスラエルの子らを呪うためにユーフラテ

川流域にあるペトルから呼び出された人，バラム・ベン・ベオル（ベオルの子バラムの意）です。

ここで最初に知っておきたいことは，この両者のあらゆる脅迫的姿勢や行動にもかかわらず，バラク王とバラムは，どこか戯画的存在（comic creations）だということです。話は，二人がお互いに理解不能であることをもって始まります。そしてそれは両者が激昂するまでにエスカレートしていきます。私たち〔欧米人〕にとって，彼らは，「無声映画」時代から初期の「発声映画」時代の，アメリカの有名なお笑いコンビ，ローレル（Stan Laurel）とハーディ（Oliver Hardy）を思い起こさせます。バラク王は，確かに，太って，横柄で，怒鳴り散らす原型で，起る事柄には常にいらつき，相手方を非難し続ける，ハーディタイプの人です。一方，バラムは，ローレルによって演じられた，細身で，地味。性格は相方よりも強いわりには，これまた的外れな反応をし，自分をコントロールできず出来事の犠牲にさらされるタイプです。日本にもこのようなタイプのペアは，伝統的漫才コンビに見ることができます。〔それはそれとして〕もし，バラク王とバラムがこのドラマにおける戯画的パペットならば，神〔の役割〕は人形師（puppeteer）ということになります。

ところが，この話においての，神の役割はまぎれもなく混乱しています。そしてこの混乱は，部分的には，〔用いられている〕神名の交代的使用に反映されています。聖書の中の神名呼称は，いくつかありますが，そのうち最もよく知られたものの二つのうちの一つは，「エロヒーム」です。これは，イスラエルだけでなく，他の諸国民も使う，神に対する一般的呼称です。他の一つの，そして特別な神名は，YHWH，〔即ち，ヘブライ語で〕「ヨッド」，「ヘイ」，「ヴァヴ」，「ヘイ」という 4 つのヘブライ文字からなっているものです。この〔YHWH という〕神名はイスラエル人とっての特別な呼称です。ユダヤ教の伝統では，この名の書かれた形での発声は禁じられ，その代替として「主」を意味する「アドナイ」を発声してきました。私たちは，〔今回の物語における〕これらの神名の交代的使用について詳細に調べる必要があります。それらの神名が，話の中心的部分の重大な矛盾と関係しているからです。

さて，バラムがイスラエルを呪う許可を願いでたとき，神は最初承認します。

しかし，バラムが実際にその使命を遂行しようとすると，神は怒ります。そして彼を殺そうと御使いを送ります。そしてまさに，その時点で，言葉を話すロバの介入が生じます。しかしながら，明らかにバラムの全ての企てに影響を与えるこれらの矛盾にもかかわらず，物語の終わりにおいて，バラムは，それを以下のように結論づけるのです。

神は人ではないから，偽ることはない。　人の子ではないから，悔いることはない（その心を変えない）[4]。　言われたことを，なされないことがあろうか。告げられたことを，成就されないことがあろうか。（民23：19）[5]

このまごつかせる矛盾〔の理由〕を，神に対しての異なる名称〔エロヒーム，YHWH〕を用いる，それぞれ起源の異なる二つのヴァージョンの話に帰することは当然ながら可能です。編集者がそれらを結合させたとき，その矛盾に気づいていなかった，あるいは受け継いだ資料のいかなる部分も削除できなかった，のいずれかということになります。しかし，このことに対する解決に向かう前に，この話それ自体の中に，少なくとも，このパズルを解くための文学的糸口があるのかどうかを検討する必要があります。

バラムとロバ

話は，バラク王と周りの国々の恐れをもって始まります。彼らにとって，イスラエルの自分たちの領土への進出が大きな脅威となったからです。この恐れは，前章〔21章〕が語る，〔他の民に対する〕イスラエルの戦勝によっても充分に正当化されうるものでした。イスラエルを阻むための〔他の民の〕軍事的手段が失敗したように見える今，彼らには他の強力な力（force）を用いる必要が出てきました。それは，聖書の世界では，現実的かつ効果的とされていたもの，即ち，呪いの力（power）に頼ることでした。もしバラク王が，〔敵国〕イスラエルの歴史を読んでいたならば，彼は違った考えをもったかもしれません。

4　〔訳者注〕（その心を変えない）はマゴネット訳。
5　〔訳者注〕聖書の日本語訳は，特に断らないかぎり新共同訳を使用している。

〔なぜなら〕神のアブラハムに対する最初の言葉には，次のような約束が含まれていたからです。「あなたを祝福する人をわたしは祝福し　あなたを呪う者（*m'kalel'cha*）をわたしは呪う（*a'or*）。…」（創12：3）。ともあれ，呪いはバラク王の世界では有力な武器でした。そしてそれを放つに最適の人物，それはバラムだったのです。

バラク王は，ユーフラテス川流域にある〔町〕ペトルのバラムを招こうと使者を遣わし，こう伝えました。

「今ここに，エジプトから上って来た一つの民がいる。今や彼らは，地の面を覆い，わたしの前に住んでいる。この民はわたしよりも強大だ。今すぐに来て，わたしのためにこの民を呪って（*arah*）[6]もらいたい。そうすれば，わたしはこれを撃ち破って，この国から追い出すことができるだろう。あなたが祝福する者は祝福され，あなたが呪う者は呪われる（*ta'or*）ことを，わたしは知っている。」（民22：5-6）

バラク王は，モアブとミディアンの長老たちからなる強力な派遣団を*k'samim*（占いの道具またはその費用）と共に送りました。彼らはバラムのもとに行き，バラク王の言葉を彼に伝えました。バラムは，よきプロの慣らいとして，すぐには返事をしませんでした。しかし，呪いの業に力をもつ「神」（'god'）にお伺いを立てます。しかも彼は，その神に，イスラエルの神に慣れ親しんでいるかのように，YHWH と呼びかけます（同22：8）。しかしながら，9節にあるように，夜，彼のもとに来たのはエロヒームでした（隣接の節における最初の神名の交代）。そしてエロヒームは〔バラムに〕尋ねます。「あなたのもとにいるこれらの者は何者か」と。この質問は文字通りにとることもできます。しかし，神はその答えを既に知ったうえでのことでしょうから，これは，バラムに派遣団の訪問の意味をよく考えるようにとの招きの言葉なのかもしれません。いずれにしてもバラムはバラク王の要請を，一語のみ変えて，

6　〔訳者注〕章句における（　　）の挿入は講演者による。以下同じ。

即ち，「呪い」に対する言葉を *'arah'* から *'kavah'*（同22：11）に変えるだけで，ほとんど逐語的に反復します。しかし，神／エロヒームは，明確に，疑う余地のない仕方で，〔バラムに対して〕「あなたは彼らと一緒に行ってはならない。この民を呪って（*ta'or*）はならない。彼らは祝福されているからだ。」（同22：12）と答えます。

バラムにとって厄介なことになりました。料金をとり，要請に応じて呪うという彼の評判に傷がつく事態になってしまったからです。しかし，バラムは，「神が呪いの仕事を果たすことを許さない」と言うかわりに，神の言葉の最初の半分だけを彼らに告げました。

「自分の国に帰りなさい。主（YHWH）は，わたしがあなたたちと一緒に行くことをお許しになりません。」（民22：13）

聖書の物語を読み解く有益な方法の一つは，語り手（narrator）が出来事を描写するやり方と，後からそれが報告される際のやり方の中にある違いを見つけることです。それらが，比較できる会話による場合には，特にそうです。今回の場合は，そのよい例といえます。バラムは神の言葉をすでに修正しているのですが，派遣団の長老たちもバラク王のもとに戻り，バラムの言葉を彼ら自身で修正して報告しています。想像しますに，彼らの報告は，バラク王が理解し，受け入れ，そして彼らの失敗〔バラムを連れて来なかった〕の故に，彼らを非難し，罰することのないように（！）とヴァージョンを修正しています。彼らは言います。

「バラムはわたしどもと一緒に来ることを承知しませんでした」（民22：14）

ここには，バラムが彼らについて行くことを，神が許さなかったということが欠落しています。長老たちの言葉の中に，バラムが意図したこととは異なる強調口調 ―― バラムの来ないのは，純粋にバラム自身の決断による ―― を読み取ることができます。

次の節をみますと，私たちには結果的に重要となる動詞 *'vayosef'* が出てきます。この動詞の意味は「加える」ですが，この文脈の中では，「反復する」または，「何かを再び行う」となります。「バラクはもう一度，…遣わした。」（民22：15）のようにです。ユダヤ教の哲学者フランツ・ローゼンツヴァイク（Franz Rosenzweig）とマルティン・ブーバー（Martin Buber）は，協働してヘブライ語聖書の独語訳を出版し，聖書本文から生じてきた問題についての論文も表しました。その中で，彼らは，特定のテキスト内で反復されるキーワードが，皮相的出来事の意味の，ある種の閾下（subliminal）のメッセージを供給する役割（system）を確認しました。ローゼンツヴァイクは，バラム物語の，*'vayosef'* の反復に，そのような役割をみています。これについては後でもう一度触れます。

さて，バラク王は第２の派遣団を送ります。今回は，長老たちに加えて，高官も含まれます。前回よりも，より多くの，そしてより重要な人々を派遣しました。彼の，事柄に対する見解は透けて見えます。バラク王の考えは「ビズネスマン」そのものです。即ち，彼の見解は，バラムは販売すべき商品をもっており，そのバラムの拒否は，単に交渉上の策略であり，バラムは，“価格”のつり上げを望んでいるにすぎない，という見立てです。異なる認識をもつ二人の主役が，異なるタイプの性格に仕立て上げられて登場する最初の戯画劇（comic play）の始まりです。

バラク王の言葉には，喫緊性と，ベールをまとった脅迫さえもが感じられます。

「ツィポルの子バラクはこう申します。『どうかわたしのところに来るのを拒まないでください。あなたを大いに優遇します。あなたが言われることは何でもします。どうか来て，わたしのためにイスラエルの民に呪いをかけて（*kavah*）ください。』」（民22：16-17）

バラムはといえば，すでに厄介な事態に巻き込まれていたのに，この新たな第２次派遣団の到着は事態をさらに悪化さるものでした。お金は確かに魅力的

です。しかし，あえてイスラエルを呪うということになれば，それは，彼のイスラエルの〔直面する〕運命に対する無関心，あるいは，ある程度のイスラエルに対する敵意さえ示すことになるからです。

バラムの出した答えには，彼がこの困難な状況から逃れたいとの試みが示唆されています。彼は，派遣団に，神の言葉（the mouth of God）に反して行くことはできない，と告げます。しかしその言葉の前半は，「バラムは実際にはより高い支払いのため駆け引きしている」というバラク王の疑惑を確信させたに違いありません。

「たとえバラクが，家に満ちる金銀を贈ってくれても，わたしの神，主（YHWH）の言葉に逆らうことは，事の大小を問わず何もできません。」（民22：18）（下線訳者）

もしバラムがこの時点で厳として不動でいたならば，威厳を保って，問題から逃れられたかもしれません。しかし，何かが彼をして，派遣団にもう一晩泊るように言わしめました。そして彼は派遣団に次のように言って，そこを離れます。

「主（YHWH）がわたしに，この上何とお告げになるか，確かめさせてください。」（民22：19）（下線訳者）

ここでの「この上」ということば（phrase）は，今回で２度目となる動詞 *'yosef'*[7] の訳です〔初回は民22：15〕。そして以前のように，神／エロヒームが，その夜バラムのもとを訪れます。しかし，今回，神は以前の決定を和らげたようにみえます。

「これらの者があなたを呼びに来たのなら，立って彼らと共に行くがよい。しかし，わたしがあなたに告げることだけを行わねばならない。」（民22：20）

7　ここは，*'vayosef'* ではなく，接続詞 vav なしの *'yosef'*。

ここでの再度にわたる神/エロヒームの開口の言葉〔「これらの者があなたを呼びに来たのなら」〕は，人々がバラムのもとにやって来た明らかな事実の単なる言明として読むこともできますが，その言葉を，次のような意味にとることも可能です。「もしそのように重要な人々が遠方よりあなたに会いに来たのであれば，あなたは彼らに協力すべきである。」と。

次の朝バラムは派遣団と共に出発します。ところが，神／エロヒームは，彼が彼らと共に行ったことに怒ります。そして YHWH の御使いが彼を妨げよう（*l'satan*）と道に立ちふさがりました（民22：22）。「御使い」（angel）と訳されている言葉，*mal'ach* は，「使い」（messenger）を意味し，ときには，人間（human）を，そして，この場合のように，ときには神的なもの（divine）を意味します。

モーセが，柴が燃えているのを見たと思ったとき，それは，実際には，そこに YHWH の御使いが立っていたからでした。これらのケースにおいて，私たち読者は，YHWH の御使いが現臨していると知っています。しかし，主役の人間たち，バラムもモーセも，その現象の真の性質については気づいていません。「燃える柴」の場合にあっては，「エロヒーム」という言葉は，モーセによって主観的に経験されたある種の神的現象，または顕現を表現するために使われています。一方今回〔の物語〕でも，神名を交代させることで，同じような文学的手法（ploy）が，語り手によって用いられている可能性があります。即ち，YHWH という名は，著者が読者と共有する客観的情報を反映し，「エロヒーム」という名は，バラム自身の主観的経験の，ある側面を表わしているということです。

もう一つの戯画劇は，全諸国民を呪う力をもち，神と直接的に語ることのできるバラムが，彼を殺そうと身構えるその御使いは見ることができない・見えないところにあります。しかし，彼のロバはできたのです！この話において最も同情すべき存在であるロバは，方向を変えることによって御使いの手にある剣から主人を救おうと試みます。バラムは，ロバのそのような行動を理解することができずに，ロバがもとの道に戻るようにと，打ちます。すると御使いは，ブドウ畑の間の，両側が石垣で囲まれた道に再び立ちふさがります。ロバは，今度はそれを避けようとして石垣に体を押しつけたため，当然バラムの足

も石垣に押しつけられました。次の文に，バラムは，「再び」ロバを打ったと，キーワードの‘*vayosef*’が出てきます（民22：25）。次の節には，御使いは，〔ロバがもう〕右にも左にも曲がることができない狭い場所に移動したと，また同じ動詞，「再び」‘*vayosef*’が使われています。ロバは身動きができなくなり，そこにうずくまってしまったため，再び（3度目）バラムに杖で打たれます。最後にYHWHは，ロバの口を開きます。そこでロバは〔主人に〕尋ねます。

「わたしがあなたに何をしたというのですか。三度もわたしを打つとは。」（民22：28）

バラムは，ロバが言葉を話すなどということは気にもとめず答えます。

「お前が勝手なことをするからだ。もし，わたしの手に剣があったら，即座に殺していただろう。」（民22：29）

この状況下で，ロバの次の答えは非常に正当なものです。

「わたしはあなたのロバですし，あなたは今日までずっとわたしに乗って来られたではありませんか。今まであなたに，このようなことをしたことがあるでしょうか。」彼は言った。「いや，なかった。」（民22：30）

バラムは，何かがおかしいと気づきます。そのとき，YHWHがバラムの目を開きます。彼は，YHWHの御使いが抜き身の剣を手にして，道に立ちふさがっているのを見ました。バラムは身をかがめてひれ伏します。御使いは，彼がロバを3度も打ったことを叱り，起っていることを正確に説明します。そしてこのように結びます。

「ロバがわたしを避けていなかったなら，きっと今は，ロバを生かしておいても，あなたを殺していたであろう。」（民22：33）

バラムは〔故郷に〕戻ることを申し出ますが，YHWH の御使いは，旅を続けるように告げます。しかし，神は，再び[8]，告げるように言ったことのみを語るように強調します〔民22：35〕。

すでに，中世において，その時代の最大のユダヤ教哲学者にして，合理主義的思想家として名高い，モーゼス・マイモニデス（Moses Maimonides）は，この，言葉を話すロバを含むエピソード全体は，バラムによって経験された預言的幻の一部として取り扱われるべきである，と主張しています。この物語の性質についての同じような結論を，動詞 *'vayosef'* の反復についてのローゼンツヴァイクの解釈の中にもみることができます。ローゼンツヴァイクに従えば，バラムは，イスラエルを呪うことを禁じられていると知った，まさにそのときに，それを最初の派遣団に告げるべきでした。しかしそうしなかったことで，その後の一連の出来事 —— 強い印象を与えた２度の派遣団，彼の「再度」神に尋ねる決断，ロバを「再度」打つこと，そして御使いが「再度」彼の道に立ちふさがる —— を引き起こすことになりました。さらにこの反復使用される動詞〔*'vayosef'*〕は，エピソード全体を区切り，バラムの，ある種の矛盾的・内的旅路（internal journey）を，彼の〔心の中の〕動きとしてカッコに括る役目を効果的に果たしています。

同じような〔バラムの心の動きをみる〕可能性は，〔物語における〕神名の交代にもみることができます。バラムが相談した「エロヒーム」は，彼自身の内的矛盾の反映として理解できます。即ち，一方では，呪いを実行したいという願望があり，他方では，神が彼らを守っているが故に，それは不可能，との認識があります。神の実際の意図は，一貫して YHWH の名の使用を通して表されています。交代する神名が —— ただ一つの例外を除いて —— このことを正確に反映しています。その例外とは，22節で，バラムに明らかに与えられた許可 —— 同じ節で YHWH の御使いによっても確認されたもの —— にもかかわらず，彼が出かけると怒るのは神（エロヒーム）でした。この変化は，バラムの一貫して曖昧である心の内的状態の観点から説明できると思います。夜，

8　1 回目は民 22：20。

バラムに対して神／エロヒームの二つの言明がありました。「あなたのもとにいるこれらの者は何者か」（民22：9）と，「これらの者があなたを呼びに来たのなら，…」（民22：20）は，まさに，あるレベルにおいて，それが間違っていると知りつつ，どうすべきか（wisdom of an action）について，彼が自分自身の内的熟考と言い争っていることを表しています。その曖昧さは，バラムが旅に出発し，自分の中に怒り ―― 彼がミッションを遂行したが故に，彼が認識する，まさに神がもったに違いない怒り ―― を経験したときに，彼自身の心の中から立ち現れたものです。彼は，自らが決断して実行したことの結果について盲目となり，結果として，御使いの存在にも盲目となりました。自らが行ったことに目覚め，はっきりと理解するためには，ロバに〔杖で打つという〕肉体的ダメージを与え，それが即彼の足にダメージを与えることが必要でした。

私が上記で展開したことは，特に，このような物語テキストのような場合には，ある意味で，交代する二つの神名使用が，出来事の異なる展望を表わしている可能性があるということです。即ち，「エロヒーム」の神名の使用を通して主役の主観的経験が表わされ，YHWH の神名の使用では，客観的情報が読者に示されるという可能性です。

もし「言葉を話すロバ」が心の内的状態，あるいはバラムの幻の一部であるならば，超自然的出来事や，奇跡を信じなければならないとする問題は消えます。文学的糸口は，これ〔言葉を話すロバ〕が，まさにこの話の著者の戯画的文学的意図の一部であることを示唆します。反対意見があるかもしれませんが，これは元来の聴き手は気づいていなかった，非常に微妙なテキストの読み方となるかもしれません。

加えて，以下のようなことも指摘されるべきだと思います。西洋の文化にとって，開口の言葉「そのむかし」（Once upon a time），または，日本の文化にとっての，「むかし，むかし」は，私たちの前にある物語が空想的性質ものであることへのシグナルです。言葉を話すロバのような要素，あるいはヨナ書の場合の「大魚」は，聖書の文化の世界の中では同じような効果をもつものでした。同様に，読者は他の文学的諸要素，例えば，反復するキーワードや交代する神名のような，物語を補強するものにも目をとめるように警告されます。例

えば，ヨナの場合，その話において，最もよく出てくる言葉は「大きい」です。大魚，神から送られた大風，それに伴う大嵐，大都市ニネベ，船員たちの大恐怖の描写に，この「大きい」が使われています。“反復は，物語を「印象に残る」（larger than life）ものにする。”これは英語の慣用句（idiom）です。

バラムとバラク王

今や，そのバラムとバラク王が出会いました。戯画的ミスコミュニケーションの第２シリーズの開始です。ここでもまた，物語は３重の反復のまわりに構築（build）されています。３度，ロバは止り，打たれます。これはバラク王がバラムの最初の３つの託宣のために築いた（build）３つの祭壇に呼応します。物語の第２の部分において，バラムはロバと同じ役割を演じ，他の人の怒りの対象となります。バラク王の理解できない，膨れ上がっていく怒りはどこかバラムがさきに経験したものに似ています〔民22：28〕。

バラムは，バラク王の対価にふさわしい占い活動のために目を見張らんばかりのパーフォーマンスをします。多分，彼は依然として神に影響を与えることを望んでいたのでしょう。あるいは，バラク王に対して可能なことは全て行ったと証明しようとしたのかもしれません。その一方で，それは，バラク王の命令〔イスラエルを呪う〕を遂行することは失敗に終わることを知っていたが故に，それに対する自己弁明への備えでもあったのかもしれません。いずれにおいても，彼はバラク王に７つの祭壇を築き，犠牲として捧げる７匹の雄牛と７匹の雄羊を用意するように要請します。その作業は２回反復されることになります。

バラムは神／エロヒームと出会います。彼は，再び，どれほど多くの犠牲を捧げたかについての，不必要とも思われる報告をこの神にしています（民23：4）！　多分これもまたバラムの自己正当化のための何の効用もない内的対話の一部なのだと思います。YHWH が，バラク王に告げるべき言葉をバラムの口に授けたからです。

さて，以下に述べられるバラムの，この最初の託宣は，「並行法」（*parallelismus membrorum*）として知られる手法を使う聖書の典型的詩文によって構成されて

います。それぞれの前節の後に，少し差異のある並行的後節が続きます。そしてそれによりアイデアを補強し，発展させます。

23：7　バラクはアラムから　モアブの王は東の山々からわたしを連れて来た。「来て，わたしのためにヤコブを呪え。　来て，イスラエルをののしれ。」
23：8　神が呪いをかけぬものに　どうしてわたしが呪いをかけられよう。主がののしらぬものを　どうしてわたしがののしれよう。
23：9　わたしは岩山の頂から彼らを見　丘の上から彼らを見渡す。　見よ，これは独り離れて住む民　自分を諸国の民のうちに数えない。
23：10 誰がヤコブの砂粒を数えられようか。　誰がイスラエルの無数の民を数えられようか。　わたしは正しい人が死ぬように死に　わたしの終わりは彼らと同じようでありたい。

バラク王はもちろん，この結果に怒ります。

「わたしは敵に呪いをかけるために，あなたを連れて来たのに，あなたは彼らを祝福してしまった」（！）（民23：11）

明らかにバラク王は聖書の詩文の隠喩的言語に慣れていません。自分は神が口に授けたものしか語ることができない（民23：12），というバラムの言い分を完全に無視して，バラク王はこの不吉な託宣から一つの文「誰がヤコブの砂粒を数えられようか。」（民23：10）だけを引き出し，それを文字通りに解釈します。そのためバラク王は，バラムが何らかの理由により，彼が見たイスラエルの数の多さの故に，呪いがかけられないのだと判断し，バラムを他の場所に連れて行き，言います。

「見えるのは彼らの一部にすぎず，全体を見渡すことはできないでしょうが，そこからわたしのために彼らに呪いをかけてください。」（民23：13）

さらに７つの祭壇が築かれ，さらに７匹の雄牛と雄羊が犠牲として捧げられます。しかし，再び，YHWH がバラムに何を言うべきかを伝えます。そこで再度，バラムは託宣（詩文）を語ります。

23：18　立て，バラクよ，聞け。　ツィポルの子よ，わたしに耳を傾けよ。
23：19　神は人ではないから，偽ることはない。　人の子ではないから，悔いることはない（その心を変えない）[9]。　言われたことを，なされないことがあろうか。　告げられたことを，成就されないことがあろうか。
23：20　見よ，祝福の命令をわたしは受けた。　神の祝福されたものを　わたしが取り消すことはできない。
23：21　だれもヤコブのうちに災いを認めず　イスラエルのうちに悩みを見る者はない。　彼らの神，主（YHWH）が共にいまし　彼らのうちに王をたたえる声が響く。
23：22　エジプトから彼らを導き出された神（エル）は　彼らにとって野牛の角のようだ。
23：23　ヤコブのうちにまじないはなく　イスラエルのうちに占いはない。　神はその働きを時に応じてヤコブに告げ　イスラエルに示される。
23：24　見よ，この民は雌獅子のように身を起こし　雄獅子のように立ち上がる。　獲物を食らい，殺したものの血を飲むまで　身を横たえることはない。

最後の節〔民23：24〕に含意されている〔イスラエルの〕軍事的脅威は，バラク王には耐えがたく思えたようです。彼はバラムに言います。

「彼らに呪いをかけることができないなら，祝福もしないでください。」（民23：25）

9　〔訳者注〕（その心を変えない）はマゴネット訳。

しかし，バラク王は依然として〔呪いの〕成功を望みながらも，最終的に今起っていることの背後に，どうも神がいるということを認めました。そこで再び，彼はバラムの言葉を文字通りに解釈し，そのいくつかのことば（phrases）にしがみつきます。そして，「だれもヤコブのうちに災い（iniquity）を認めず」（民23：21）と，「ヤコブのうちにまじないはなく　イスラエルのうちに占いはない。」（民23：23）を結びつけ，神が〔ヤコブに〕何かの罪（iniquity）を認めることを期待して，次の言葉をもって，バラムを，もう一つの場所に向かわせます。

「…たぶん，それは神（冠詞付きの「エロヒーム」）が正しいとされ，そこからなら，わたしのために彼らに呪いをかけることができるかもしれません（！）」（民23：27）

そこでさらに７つの祭壇が築かれ，動物犠牲が捧げられます。

しかし，今回，バラムは，イスラエルを祝福することはYHWHの目によいことであると最終的に認め，いつものようにまじないを行うことは止めます（民24：1）。バラムが，イスラエルが部族ごとに宿営しているのを見渡したとき，神/エロヒームの霊が彼の上に臨んだため，YHWHが言葉を彼の口に授けた以前の時とは異なり，彼自身の言葉で語ります（民24：2）。神の二つの名の〔交代〕理論に忠実であろうとするならば，これは，YHWHの外的な言葉が，今やバラム自身の内なる理解と一致したことを示唆します。もはや口に授けられた言葉をただ単に朗唱するのではなく，彼自らの託宣を語るように霊感を受けた（inspired）からです。彼は，これまでは盲目であったことを皮肉をもって想起するかのごとく次のように〔その託宣を〕始めます。

ベオルの子バラムの言葉。　目の澄んだ者の言葉。
神の仰せを聞き　全能者のお与えになる幻を見る者　倒れ伏し，目を開かれている者の言葉。（民23：3-4）

続けて彼は，イスラエルの将来の軍事的成功のテーマを，彼の経験に基づいて繰り返します。さらに神によってアブラハムに与えられた祝福の真理を確認して託宣を終えます。

あなたを祝福する者は祝福され　あなたを呪う者は呪われる。（民24：9）

これに対してバラク王は激しく怒り，手を打ち鳴らします。そしてバラムに彼の場所にさっさと失せるようにと警告します。

お前を大いに優遇するつもりでいたが，主（YHWH）がそれを差し止められたのだ。」（民24：11）

〔これに対して〕バラムは，第２派遣団に語ったこと ―― 神が彼に語ったことのみを語ることができる ―― を反復するだけでした。それは彼自身の経験によって確認されることになったことでもあります（民24:12-13）。しかし，バラク王は彼を解雇します。

バラムは，イスラエルの将来の成功と，周りの国々を待ち受けている災いの運命についての一連の預言をし，これ〔バラク王の仕打ち〕にリベンジします〔民24：15-24〕。物語は，バラムが彼の元来た場所に戻り，バラク王は自分の道を行くことで閉じられます（民24：25）。

概観

話の詳細はこれくらいにして，ここでのいくつかの基本的テーマについて考えてみたいと思います。

まず，全体を貫いて反復される鍵となることば（phrase）は，バラムが彼の個人的望みにもかかわらず，神が彼の口に授けた言葉しか語ることができない，というものです。そして必要とあらば，神は，その神的力をもって，ロバの口にさえ言葉を授けます。

次の主要な〔テーマ〕は〔バラムとイスラエルの〕コントラストです。バラ

ム自身が指摘したように，彼の商売の必需品である占いとまじないの利用が，イスラエルにはないことです（占い，まじないの禁止についてはレビ19：26）。バラム自身も，終わりには，そのようなものを脇におき，神/エロヒームの霊による霊感を受けて第３の託宣を語りました（民24：1）。

第３のテーマは，全体を通して言及されている祝福と呪いに帰せられる現実の力についてです。イスラエルは神の祝福によって守られています。元来，それはアブラハムに与えられたものです。しかし，呪いをかけることにおいて最も名のある，その才に恵まれた達人とされる人でさえ，この神の力に対しては何もできません。多分，この事実が〔下記でみるように〕この物語にモーセが登場しないことの理由かもしれません。即ち，この〔バラム物語のような〕特別なケースにおいて，いかなる人間の介入も必要とせず，神がそのような呪いからイスラエルを守ることを個人的に保障し，神の祝福に挑戦を試みる人々を笑い，道化者にすることさえできるからです。

それでは，この物語は，トーラー〔五書〕のより広い物語の中では，どのような文脈化が可能なのでしょうか？出エジプト物語の始めにおいて，神が敗北させた敵は，その時代の偉大な軍事力を代表するファラオでした。この物理的力に対して神は，神的「軍事的」武器である自然の威力（forces）――エジプトの初子の死を頂点とする10の災い，エジプト軍を溺れさせた葦の海の水――を解き放ちます。しかし，彼らの旅路の終わりにあたり，今や約束の地に入ろうと準備するとき，もう一つの力（power）が彼らに立ちはだかったのです。それは軍事的力ではなく，霊的な力です。今回バラムによって代表されるこの敵は，祝福する，呪う，という言葉そのものの力を代表するものです。それは，人が，神に向かう以上に向かってしまう，あらゆる迷信，まじない，魔術，占いとも関係しています。

そろそろ，私たちの出発点だった問い「なぜ，ヘブライ語聖書には言葉を話すロバが登場するのか？」に立ち帰るよいときかもしれません。〔この問いに対する〕可能性のある答えの一つは，ファラオの力とバラムの力の相違点に横たわっています。実は，イスラエル社会の性質を変容させた一つの出来事――シナイ山で神との契約を受け入れたこと――は，これら二つの敵と相対

した中間地点にあります。その契約とは，「あなたには，わたしをおいてほかに神があってはならない。」（出20：3）という根本原則（principal）をもって始まる契約です。

さて，バラムが呪おうとした〔イスラエルの〕人々は，かつてのエジプトの宗教的実践にその身をさらしていない，荒野で生まれた新世代によって代表される人々でした。この新世代の人々にとって，この世界には，一つの力（power）として，神のみが存在し，占い，魔術的手法を含む他の形の全ての偶像礼拝は永遠に捨て去られるべきものとされていました。未来において彼らの生活を支配すべきは神の言葉です。神に対立する，バラム的なものと，バラムによって代表される全ては無力なものです。アブラハムに対する神の約束の一部は，〔このバラム物語において〕他の人々の呪いからアブラハムの子孫を守ることで劇的な形において成就をみたのです。

民数記において，この物語の２章前には，モーセが約束の地に入ることを神が許さなかったことを記す不思議なエピソードがあります。上記の〔魔術的手法についての〕解釈は，このエピソードに次のような有意義な視点を提供するかもしれません。

それは，人々が，水がないということで不平を鳴らしたとき，神はモーセに杖を取るように指示します。その杖は，エジプトで奇跡を行ったときのものであり，前回には岩を叩いて水を出したときに使ったものです〔出17：6〕。しかし，今回，モーセは，岩に語りかけるようにと指示されました。しかし，彼は，前例と全く同様に，岩を打ったのです（民20：7-11）。そのような明らかにわずかな過失に対しての神の裁きは厳しすぎるように思われます。しかしながら，それに対する一つの可能性ある説明は以下のようなものです。杖は魔術的力を代表し，それはエジプトの魔術師に対抗するために，エジプトという環境の中では必要なものでした。しかし，そのような力は，もはや必要がなくなりました。なぜならば，イスラエルの子らは神の言葉によって守られているからです。モーセは，民に対する怒り〔民20：10〕の故に，その決定的な瞬間において魔術的活動の古い形態に後退してしまったのです。その点において，彼は未だにエジプト世代に属しており，新しい地に定着する新しい世代に属してはいな

かったのです。

祝福と呪いを操作する言葉の達人であるバラムは，公的な仕方（public manner）で，解放する神の力を経験する必要がありました。その力とは，イスラエルを，そして彼の物語を読む読者をして，魔術，占い，迷信の世界から解放する神の力です。それは，バラム自身が認めざるをえなかったものです。

ヤコブのうちにまじないはなく　イスラエルのうちに占い（*kesem*）はない。神はその働きを時に応じてヤコブに告げ　イスラエルに示される。（民23：23）

結び

今回の主題に対する最後の言葉，それはやはり，ロバについてであるべきでしょう。ラビたちは，この物語のロバの運命について関心をもち，ロバは，このエピソードのすぐ後で死んだと想定し，そのための二つの理由を編み出しました。第一のものは，私たちの今回のテーマに直接関係します。言葉を話すロバに大きな感銘を受けた人々の中には，すぐに，ロバ礼拝を始める人々が出てくるに違いない。この世界にもう一つの偶像をもたらすよりは，ロバは死んだとする方がよい（！）と考えました。

もう一つは，バラムを思いやる解釈です。人々がロバを見る度に，バラムの失敗と，起っている出来事を真に理解できなかった彼の不明さを思い起こすに違いない。ラビたちにとって，公の場で誰かに恥をかかせることは，その人を殺すことに等しいことでしたから，バラムをそのような恥から救うためには，ロバは死んだ方がよい，と考えました。この解釈によれば，ロバは生涯を通して主人によく仕え，その死によってさえも，なおその主人に仕えたことになります。